

「^{きょうじ}矜持を持ちたい(菊池寛生誕120年)」

現代の日本人が失いつつあるものの一つに、「^{きょうじ}矜持」というものがあるように思います。その意味を他の言葉で的確に言い表すのは難しい言葉ですが、辞書を引くと「自分の能力を信じて抱く誇り」と記されています。

私がこの言葉を意識するようになったのは、バブル経済が絶頂期を迎えようとしていたところに、元旦から大型スーパーが店を開けることに対して、ある識者が、「正月ぐらいは商売を休む矜持を持ちたい」と発言していたのを目にしてからです。元旦から店を開けることに対して、私自身も違和感を感じていたものの、時代が求めるのであれば、仕方ないではないか、と思っていたのですが、「矜持を持つべき」という言葉が、私の違和感の正体をえぐり出していました。

昨年の世相を表した漢字は、「偽」でした。食肉や野菜の産地偽装に始まり、賞味期限の改ざん、政治の偽り、耐震偽装など、次々と化けの皮がはがれ落ちました。今年は、「偽」を真ん中からたたき割って、「人の為」になるような年になって欲しいとしゃれていましたが、相変わらず、似たような話が後を絶ちません。商人の矜持、政治家の矜持、料理人の矜持、役人の矜持、そして日本人の矜持はどこへ行ってしまったのでしょうか。

さまざまな文献などを見る限りでは、戦前の、少なくとも明治の後半から昭和初期にかけての日本人の思想と生活態度の中には、この矜持というものがしっかりと意識され、根付いていたように思います。もちろん、お門違いや鼻持ちならない矜持もいっぱいあったのですが、為政者から庶民に至るまで、自らの矜持を持つことは、当たり前のこととして、認識されていたように見えるのです。

そんな時代を生きていたのが、今年生誕120年、没後60年を迎える本市出身の文豪・菊池寛です。文藝春秋社を設立し、芥川賞、直木賞を創設した実業家でもあります。この文藝春秋社の社長である菊池寛の日常生活を、秘書の女性の目を通して「こころの王国」という小説で書かれた、作家で東京都副知事の猪瀬直樹さんと、直孫で菊池寛記念館名誉館長の菊池夏樹さんのお二人を迎えて、来る7月4日(金)にサンポートホール高松で記念講演会が開催されます。

この機会に、それぞれが自らの矜持をしっかりと持ち、粹に生きようとしていたように見える「モダン日本」(菊池寛が創刊した雑誌の名前)の時代の人々の生き様を、菊池寛を中心に、少しのぞいてみてはいかがでしょうか。